

CARILLON カリヨン

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学 学報



Contents

目次

特集企画	東日本大震災リレー・ボランティア Never Stop Action !	2
	■ 東日本大震災と本学の動き	3
	■ 震災ボランティアに参加して～学生 Voice ～	6
	■ クローズアップ復興人 〈看護学科 助教 佐々木 亮平〉	8
	■ 日本を一本に!“ふくしまの集い”～日本全国メッセージ集め&タスキリレー ...	9
■ 寄稿	10	
・ 大学における社会性、共同あつての個性 看護学部 学部長 尾岸 恵三子		
・ 介護福祉士の災害時支援 ～本学科における新たな取り組み「災害福祉論」～ 介護福祉学科学科長 高橋 美岐子		
・ 大学院修士課程で学ぶこと 看護学研究科長 村井 貞子		
■ 1年間の活動を振り返る	12	
■ 国際人道法フォーラム 2011	13	
■ 災害救護訓練を実施	13	
■ サークル活動報告	14	
■ 紙屋先生と佐藤真悟さん	15	
■ オープンキャンパス予告・入試日程・編集後記	16	

2012 No. 2

カリヨンは、(フランス語・Carillon)教会の塔などに吊り下げられる音程を異にする多数の鐘。16世紀以来、特にフランドル地方(現フランス領)で発達し、自動装置を持つものもある。赤十字の理念より「人道・博愛・奉仕」を3つの鐘に投影した本学のシンボルとして、平成8年の短大開学時に設置された。これにちなんで本学学園祭も「カリヨン祭」と呼ぶ。



特集企画

東日本大震災

リレー・ボランティア

Never Stop Action!



避難所で学生がボランティアのリレー
陸前高田市第一中学校で6月～8月上旬まで活動

過酷な状況にある東日本大震災の避難者を支援しようと、本学の看護学科・介護福祉学科の学生約150名が6月1日から8月5日まで毎週3日間、交代で岩手県陸前高田市にある市立第一中学校避難所において被災者の生活支援にあたった。被災者の厳しい生活状況がニュース等で報道されるにつれ、学生らから「自分たちも何かできないか」とボランティア活動への関心が高まったことから大学側がバスや宿舍の確保に動き、活動が実現したもの。

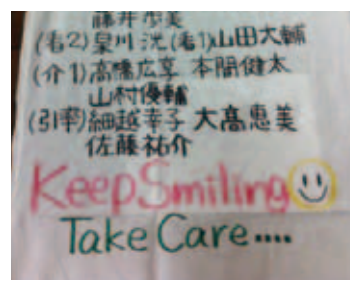
学生は教員、事務職員とチームを

組み、毎週水曜から金曜まで10人前後がバスで現地に移動、隣町の住田町役場が提供してくれた曙公民館を拠点に避難者の食事の調理、配膳、郵便物の仕分け、掃除など多彩な活動にあたった。真夏の猛暑の中、学生らは被災者自身が自主運営する避難所のスタッフや避難者の皆さんとのふれあいから多くの学びを得た。

ボランティア活動は受け入れ側と

ボランティア双方の相互理解があって初めて成り立つが、同避難所自治組織「絆の丘」の横田代表からは「多くの皆さんから多くの物的支援を受けてきたが、日本赤十字秋田看護大・短期大の皆さんからは「こころ」をいただいた」との励ましの言葉をいただき一同、深い感謝の念をい danku とともに、被災者の皆さんの一日も早い生活再建と復興を祈念した。

避難所で学生がボランティアのリレー
いま、私たちにできること。



Never Stop Action!

東日本大震災と本学の動き



日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学の動き

3月

11日

◆地震発生時の対応(2011/3/11)
14:46 地震発生(秋田市震度5強)
状況を確認し、252講義室で講義中の学生107名および職員をホールに集合させる
交通機関が麻痺している状況のため、車通勤・通学の車に分乗し帰宅させる
17:00 学生・教職員すべて帰宅

◆齋藤准教授(2011/3/11~3/19)石巻赤十字病院には3/13から
ニュージーランドでの「こころのケア」派遣前に震災が発生し、石巻赤十字病院へ派遣先変更

12日

◆安否確認・構内点検(2011/3/12)
12:00 病院・本学の電気が復旧
13:00 構内の破損箇所をチェック。大きな破損箇所はなし
17:00 学生に安否確認。学生の安否は3/13には判明

13日

16日

◆佐々木亮平助教(2011/3/16~3/21)
陸前高田市での保健医療支援のため、秋田県支部第6班に同行

17日

◆学生奉仕団他一般学生(2011/3/17~3/28)
秋田県支部内において、県に寄せられた救援物資の仕分けを実施

18日

◆教職員親睦会一同(2011/3/18)
秋田県支部に50万円を大震災義援金として寄付

19日

◆学生奉仕団(2011/3/19)
秋田駅連絡通路(ぼぼろーど)において、義援金街頭募集活動を実施

22日

◆学生奉仕団他一般学生(2011/3/22~3/26)
秋田県支部内において、募金集計作業を実施

23日

◆学生奉仕団(2011/3/23~3/25)
秋田駅前アゴラ広場において、義援金街頭募集活動を実施

24日

◆中村准教授、佐藤恵美子助教(2011/3/24~3/27)
陸前高田市での保健医療支援のため、秋田県支部第2陣と同行

26日

◆井上教授、永易助教、柏木助手(2011/3/26~3/30)
石巻赤十字病院救命救急科、整形外科棟での交代要員として勤務。
また、石巻赤十字看護学校の再建ニーズ調査を実施

27日

◆牟田講師、佐々木亮平助教(2011/3/27~3/30)
陸前高田市での保健医療支援のため、秋田県支部第3陣に同行

4月

5日

◆入学式・大学院開設記念式典(2011/4/5)
大震災の影響を考慮し、入学式の簡素化および記念式典は延期とする

◆学生奉仕団(2011/4/5)
入学式の際に義援金募集活動を行う

6日

◆中村准教授、佐々木亮平助教(2011/4/6)
陸前高田市での保健医療福祉包括ケア会議に参加

7日

◆余震への対応(2011/4/7~)
M7.4の余震により、翌日の講義や図書館の開館、土曜日の大学院授業についてすべて中止とする

16日

◆学生奉仕団、井上教授他教職員3名(2011/4/16~17)
陸前高田市において、秋田県支部・県青年協議会合同の炊き出しに協力

6月

1日

◆東日本大震災被災者支援学生活動(陸前高田第一中学校、住田町公民館)
(2011/6/1~6/4) 第1次派遣19名 (教職員3名、学生16名)
(2011/6/8~6/11) 第2次派遣20名 (教職員3名、学生17名)
(2011/6/15~6/18) 第3次派遣19名 (教職員3名、学生16名)
(2011/6/22~6/25) 第4次派遣16名 (教職員3名、学生13名)
(2011/6/29~7/2) 第5次派遣18名 (教職員3名、学生15名)
(2011/7/6~7/9) 第6次派遣21名 (教職員4名、学生17名)
(2011/7/13~7/16) 第7次派遣16名 (教職員3名、学生13名)

7月

16日

◆学生ボランティア(2011/7/16~8/13)
旧小児療育センターにて秋田県によせられた救援物資の仕分け作業を実施

20日

◆東日本大震災被災者支援学生活動(陸前高田第一中学校、住田町公民館)
(2011/7/20~7/23) 第8次派遣6名 (教職員3名、学生3名)
(2011/8/4~8/6) 第9次派遣11名 (教職員3名、学生8名)

8月

6日

◆学生奉仕団(2011/8/6~8/7)
陸前高田市「けんかセタまつり」へのバビヘアアイス出店、バザー手伝い等

本学では、上記以降も継続して被災地支援のためのボランティア活動を行っております。





120人の学生が参加した募金活動(ぼぼろーど)



陸前高田第一中学校でのうどん炊き出し(4/17)



宿舎での夕食。被災地だからこそ…“笑顔”が宝…



炊き出しの配膳を行う学生赤十字奉仕団員



配膳準備に慌たさい学生たち



陸高まつりでババヘラアイスを出店



陸前高田第一中学避難所の調理室(理科室代用)で



大型トラックに救援物資の積み込み作業を行う学生赤十字奉仕団員

第一班

6月1日～6月4日 / 19名



第二班

6月8日～6月11日 / 20名



第三班

6月15日～6月18日 / 19名



第四班

6月22日～6月25日 / 16名



第五班

6月29日～7月2日 / 18名



第六班

7月6日～7月9日 / 21名



第七班

7月13日～7月16日 / 16名



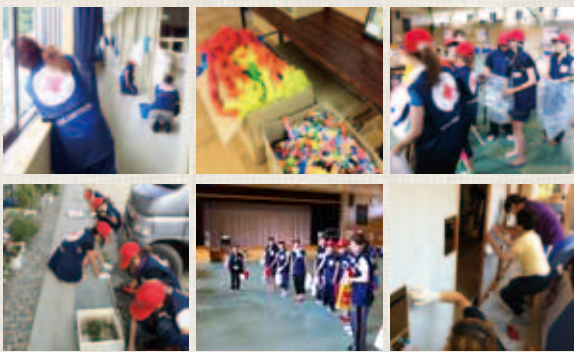
第八班

7月20日～7月23日 / 6名



第九班

8月4日～8月6日 / 11名





学生Voice

震災ボランティアに参加して

日本赤十字秋田看護大学・短期大学では、東日本大震災が発生した3ヵ月後の6月、学生を中心としたボランティアチームを結成し、秋田市から約200km離れた岩手県陸前高田市へボランティア活動へ向かいました。被災者支援に参加した学生は、何を感じたのか。学生の声を紹介します。

陸前高田市は、岩手県南東部の太平洋岸に位置する町で、隣接する同県大船渡市や宮城県気仙沼市とともに陸前海岸の北部の中核を成しています。東日本大震災では、震度6弱の地震と大津波によって市中心部は市庁舎もろとも壊滅し、市の全世帯中の7割以上が被害を受けました。



人の強さを知った4日間

介護福祉学科 2年
松山朱里さん

7月13日から7月16日に岩手県陸前高田市にボランティアとして町に入ると、目の前の風景は瓦礫の山や一階が津波で無くなってしまった建物等…。私は、あまりの衝撃に言葉を失ってしまいました。しかし、現地の方々の中には、他の人を不安がらせないようにと必死に笑顔を作っている人が多かった。

その笑顔の奥に、今まで経験したことがないような不安や辛さ、悲しみを抱えているのだと思うとすごく辛い気持ちでいっぱいになった。そんな中でも笑顔を忘れようとする現地の方々の強さに心を打たれた。こんな時だからこそ、ひとりではなくみんなのために、みんなはひとりのためにという言葉大切にしていきたいと強く思った。



人のつながりを大事にしていきたい

看護学科 2年
笹川夢都美さん

私が陸前高田市に行ったのは、震災が起きてから5ヵ月後でした。避難所に残る方は、いつも輪をつくって私たちを呼んでお話しをしてくださいました。

みなさんは、私たちの行っている活動を一緒に手伝ってくださったり、わざわざ街を知ってほしいと車で街を紹介してくださいました。陸前高田市のみなさんは、人とのつながりを、一つ一つの出会いを大切にしているように感じました。そして、そのつながりや出会いがみなさんの心の支えになっているのではないかと感じました。

私も、人とのつながり・出会いを大事にし、私との出会いで人が幸せになれるような人になりたいと思いました!



忘れられない“強い言葉”

介護福祉学科 2年
高橋茉美香さん

4日間という短い時間でしたが、現地の方々と関わることができて本当に良かったと思っています。実際に現地へ足を運んだことによって震災の恐ろしさや、何もかも奪っていった津波の傷跡を目で見て肌で感じることができました。

現地でのボランティアの際は具体的な役割がありましたが、今の私たちに出来ることは限られています。その中でも自分に出来ることを、これからも継続していきたいです。そして、東日本大震災を「忘れない」こと。ボランティアを通して出会った方たちの笑顔や、「大丈夫、また頑張ればいいんだから」という力強い言葉を私は絶対に忘れません。



これからも行動を!!

看護学科 3年
齊藤保奈美さん

震災後、テレビや新聞などの様々な報道を見て、自分も何かしなければいけないと思うようになりました。被災された方の力になりたいと思い、奉仕団での炊き出しや大学で計画された陸前高田へのボランティアに参加しました。被災地を見て改めて自分にできることは何か、何ができるのか考えるようになりました。

今は「ふくしまの集い」を通して少しでも福島の人になれればと思い活動しています。これからも自分にできることは何か考えて行動に移していきたいです。



ふるさとのために何かを…

看護学科 3年
館内美波さん

南相馬市は、東日本大震災で津波と原発事故による放射能被害をうけました。

それでも私にとっては、自分が育った街であり、実家があり、家族がいて、友人もいて、ホッと安心感を与えてくれる“地元”です。みんながやっぱり地元はいいなと思うように、私にとって南相馬市は大切な所で、大好きな所です。そんな福島のために、私にも何かできないかと思ひ、ボランティア団体「ふくしまの集い」に参加し活動しています。



笑顔のチカラ

看護学科 3年
工藤 諒さん

私が陸前高田に行ったのは6月の事でまだまだ震災の傷跡が残る状態でした。しかし、訪れた避難所では、多くの人たちがボランティアである私たちを温かく笑顔で迎えてくれました。

避難所には小さい男の子がいて、その子が笑うと抱っこしているおばあちゃんも笑顔になり、その周りにいる人たちも笑顔になり、笑顔がどんどん広がっていきました。もっともっと全国にこんな笑顔が広がればいいなと思いました。



テレビでは伝わらない現実

看護学科 1年
菊田真由子さん

私は、震災から3カ月たった6月8日から11日の4日間、岩手県陸前高田市でボランティア活動をしてきました。

震災からまだ3カ月しか経っていないということもあり、多くののがれきが道路わきにありました。テレビで見て現地の状況はわかっていたつもりでしたが、実際に目の前にすると、テレビで伝わってこない現状を知り、とてもつらくなりました。

「震災で有名になった地を復興させて、人を呼べるようにしたい」という被災者の声を聞いて、私も何らかの形で地元の福島も含め、支援していきたいと思いました。



みんなでつくる日本!!

介護福祉学科 2年
佐々木美佳さん

震災から1年、未だにボランティアで被災された方々に何をしておあげられたのか考えています。私はボランティアを通し、新たな出会いや人と人とのつながりの大切さを改めて感じました。被災された方々は今も様々な気持ちで生活していると思います。何が出来るかは分かりませんが、もっと被災された方々の気持ちを理解しようと、みんなで団結して再スタートしようと思ひではないでしょうか。何年経っても絶対にこの震災は忘れてはいけないと感じます。



同じ目線で行動を

看護学科 3年
土田あゆみさん

4月17日に赤十字奉仕団の一員として陸前高田に行ったとき、目の前に広がる景色に言葉も出ず、ただ茫然としていました。6月の陸前高田のボランティアに行く前まで、私が行っていいのだろうか、何が出来るのだろうか悩んでいました。実際に被災地で活動をし、学生の私でも「ありがとう」といってもらえる、必要とされていると感じることができました。こんな私でもできるという思いがあり、今も震災に関するボランティアに関わり続けています。私たちが何かをするのではなく、同じ目線で共に行動していくことの大切さを学ぶことができました。



人と人がつながる。

Never Stop Action!

「支援」から「協働」へ

いま、私たちにできること。

クローズアップ 復興人

看護学科 助教 佐々木 亮平

1975年岩手県盛岡市生まれ。2007年岩手県立大学大学院看護研究科博士前期課程修了。1998年岩手県内初の男性保健師として岩手県久慈保健所に採用後、大船渡保健所を経て、2007年から3年間、陸前高田市役所へ人事交流及び権限移譲に伴う派遣で出向。2010年4月より現職。岩手県（陸前高田市）退職から1年が経たないうちに「3.11」を迎えた。発災5日目より発災後10ヶ月間はほぼ毎週現地に入り続け、主に被災地と全国からの支援の間に立つコーディネーターとしての役割を担い現在に至る。現在も月1回の保健医療福祉包括ケア会議の運営や復興計画の策定を担いながら継続して現地で「協働」中。

本学着任前は、陸前高田市で生活し保健師として勤務していましたが、退職後1年も経たないうちに千年に一度とも言われる未曾有の災害が発生し、数え切れないほどの多くの仲間、地域の文化や歴史、そして「まちそのもの」を突然、そして一瞬にして失うこととなりました。

押し寄せた津波の高さは、浸水高でも18m以上、遡上高で20m以上という、まずもって想定し得なかった巨大な力となって、7万本の高田松原に象徴される風光明媚な三陸海岸の地方都市を丸飲みにしてしまいました(中心市街地面積の約9割が浸水・流失、総世帯数8,000世帯の半数近くが全壊、死者・行方不明者約1,800人)。

発災5日目に現地に入った際、元同僚の保健師9名中6名が犠牲(行方不明)になっているという状況に愕然とし、他にも看護師や栄養士、社会福祉士といった専門職に限らず、市職員の約3割が犠牲になったという、聞くに堪えない厳しい現実に言葉を失ってしまいました。

都市機能も自治体としての行政機能も完全にマヒし、①場(市庁舎)があり、②モノ(資料やデータ、車、通信手段等各種物品類)があり、③

ゆうずうむげ

融通無碍に活動を展開できる保健師が被災地でも非被災地でも強く求められています。

人(職員)がいる、そして、④経験や関係性(関係機関の連携体制等)があるということを前提としていた災害復旧活動は「全く行えない」という状態からスタートせざるを得ない状況でした。これまでの災害時における全ての常識が最初から、そして根底から覆された状態だったのです。

現在、発災から1年が経とうとしていますが、災害急性期にあっても今の時期のような慢性期にあっても、一住民から医療機関等関係者や他分野の関係者まで、さまざまな立場にある方々と協働で活動することを大切にしています。

現地では部分的な復旧は進んだものの、復興したと言えるようになるにはまだまだ先の話で、5年、10年単位の時間を必要としています。まちを「元に戻す」という発想から、「創りなおす」そして、以前よりもよりよい状態にする(Build back better)という考え方が共通認識になっています。つまりはこれからなのです。1年で何が落ち着いたとか、整理されたわけではなく、ようやく復興の途に立ったところなのです。これから本当の意味で復興していくにあたっては、もう「支援」ではなく、被災地とともに進む、「協働」してくれる人々が

現地では必要とされています。

現地のスピード感、雰囲気にあわせて「待てる」力、「待つ」勇気がこれからは重要になってくると思います。同じ時代を生き、いわば「同じ列車に乗っている私たち」にできることは何なのか。ひたすら待ち続け復興が遅れては本末転倒ですが、そういう状況を判断しながらの間(ま)を持てることを大事にしていきたいと考えています。

この1年でできたことと、できなかったことは何だったのでしょうか。私の中にもいまだに答えはありません。

今回の災害は日本社会の公衆衛生活動に本来あるべき姿を問いただしています。しかしこれは、私たちに過去や原点に戻れということだけではなく、新しい価値を生み出させ、見出させようとしているのです。つらいことがなければ人は成長しないと言うには酷すぎる状況ですが、今こそ本学はもちろん、全国のみなさんの智習を結集させ、「前へ」進んでいきましょう。

行動の中に、未来(答え)があると信じて。

◆災害時の公衆衛生「復興に向けた陸前高田市の取り組み」については、下記ホームページからご覧いただけます。

→<http://www.koshu-eisei.net/saigai/rikuzentakata.html>



日本を一本に! “ふくしまの集い” ～日本全国メッセージ集め&タスキリレー～

「ふくしまの集い」は、日本赤十字秋田看護大学5名、秋田大学8名の計13名からなるボランティアグループで、メンバー全員が福島県出身です。

秋田から福島のために何かできることはないかと考え、昨年の11月にスタートしました。集会は定期的に行われますが、全員が参加することができないのが現状です。全体で行う活動と各大学で行う活動があり、より活発な意見交換が行えるようにしています。また、情報を共有するために、そのとき話し合った内容をメンバーが常にネット上で見ることができるようにしています。

3月10・11日に福島県で全国学生復興イベント「JASP in FUKUSHIMA」というイベントが開催されました。

JASPとはJapan All Students Projectの頭文字です。JASPのメンバーは震災から時間が経てば経つにつれて、人々の震災への意識が

風化してしまうのではないかと。ほんの少しだけでもいい、もっと福島のことを知ってほしい。そして忘れないでほしいという思いから福島のために何かできることはないかと考え“にっぽんをいっぽんに!”をテーマに、全国の想いを福島に届けるため3月11日までの約1ヵ月間、宮崎・沖縄をスタートし、福島のゴールを目指して、日本全国47都道府県をたすきリレーでつないでいくというプロジェクトでした。

この全国たすきリレーの秋田県区間は2012年3月4日。私たち「ふくしまの集い」のメンバーは会場にて、来場者に福島に向けてのメッセージを書いてもらい、それを写真に収めていきました。始めは、私たち「ふくしまの集い」のメンバーだけであったメッセージが多くの方々の協力により、約100ものメッセージ写真になりました。イベントの最後には全員で、“I love you & I need you ふくしま”を合唱。それらのメッセージ写真と合唱の

様子を秋田から福島へ、3月11日のイベントに向け届けました。

震災から一年を節目に、世間の関心は徐々に薄れていくことが懸念されていますが、私たち「ふくしまの集い」が支援活動をするることにより、福島県民に元気と希望を与えこれからの復興に向けての力になることを信じています。今、私たちが復興に向けてすべきことは何なのか。すぐに答えが出せなくても、日々復興への関心を絶やすことなく生活することで、自分たちに出来ることを見つかったときに行動できます。新しい出会いやつながりをたくさん作っていくことで大きな力になるでしょう。そのような思いを胸に活動していきたいと思っておりますので皆さんもどうか応援してくださいませようよろしくお願いします。

(看護学科3年 土田 あゆみ)



福島県出身の学生が中心となり、活動しています。
上の写真は、ステッカーのサンプルとミーティングの様子。
ステッカーは後日販売予定。



秋田大学の学生らとともにミーティング

大学における社会性 共同あつての個性

看護学部 学部長
尾岸 恵三子



私の1日は研究室の窓から見える櫟の大木への挨拶から始まる。冬の雪に耐える姿からは雄々しい力を、春の芽吹きからは爽やかな活力を頂く。

本大学は、身近に大自然の営みを感じながら学ぶことのできる大学である。南に遙か鳥海山を仰ぎ、見渡す限りの田園風景の直中にポツンと学舎がある。自然との対話は人と他の生物を同列にみた環境の中で生きとし生ける物を実感する瞬間でもある。



西行法師は「願わくば花の下にて春死なんその如月の望月の頃」と詠っているが、そんな心境にもなる。

大学教育の中で個性を出すようにと盛んに言われるが、個性化のためには横の繋がりが必要である。みんなと共同でやっている中で、自分らしさが具体的な姿で現れ、本当の個性が確立され则认为。学生時代のドイツ語の時間に「Abwesenheit」、「非存在」「お化け」と訳し、それは「具体的な対象と格闘しないと、人間はお化けになってしまう」ということであつたと思う。知識と情報のみが流れていく情報化時代、客観的現実とぶつかって格闘しない状況は、まさにこのお化けになることである。

農家の生まれの私が畑を耕すことで土の性質を実際に知り、鍬の使い方を体得するというプロセスがないまま農業を論じる。つまり、本当の客

観性を知らないまま、わけしりの知識を論じることに似ている。とその時私は理解したものである。

大学での学びは、現実によりたきなおされながら粘り強く学んでいくというプロセスがないと自己意識だけが肥大化し、それが社会性と切り離されることになる。知識や情報を手にするが、その元となる事柄と四つに取り組んでこそ、切磋琢磨してこそ自分らしい具体的姿が現れるのではないだろうか。切磋琢磨をとおして、芯からの真の個性が生まれると考える。こうした実際との関係の中で粘り強く思考し、矛盾の集積の中から打開策を絞り出していく態度が重要であろう。

野草の咲く本学の広大なグラウンドでの語らいは、大自然との共生を可能にし、大学生生活にて社会性、真の個性を開花することに大いに役立つものとする。個性豊かであれ!!



介護福祉士の災害時支援

～本学科における新たな取り組み「災害福祉論」～

介護福祉学科では、平成21年度のカリキュラム改正を機に、赤十字領域のなかに「災害福祉論」を必修科目として設定しました。

講義内容は、災害の歴史と現状、災害の今日的課題、災害と赤十字、災害時の介護福祉士の役割、災害時の支援などです。また、演習では、災害時を想定した紙上事例を用いて、災害の備えや災害時の具体的支援などについてグループ学習を行い、その成果を発表します。さらに、今年度は、東日本大震災の際に避難所で支援活動を体験した介護福祉士、介

護老人福祉施設の現場で対応にあたった施設長による特別講義を実施しました。

全国的にみても、「災害介護」を科目として学べる介護福祉士養成校はほとんどなく、平成23年度全国教職員研修会では本学の教育内容・結果を紹介する機会が得られ、その必要性について多くの意見が交わされました。

自然災害の多い日本で、今、災害時要援護者（災害弱者）である障害者や高齢者などの災害時支援のあり方が問われています。災害発生直後をはじめ、介護福祉士が利用者のそ

介護福祉学科 学科長
高橋 美岐子



の後の生活をどう支援していくのか検討課題も多くあります。

東日本大震災では、日本赤十字社として初めて介護チームを被災地に派遣しました。障害を持つ方々や高齢の方々の生活をサポートする介護福祉士が、「人道」の理念を災害時においても発揮できるよう、学生とともに考え、「生きる」を支える人になる”その素地を築いていきたいものです。



研究科長メッセージ

大学院修士課程で学ぶこと

日本赤十字秋田看護大学は23年4月に大学院看護学研究科修士課程を開設しました。大学院修士課程で学ぶ事は「研究」です。「研究」とは、「よく調べて事実や道理を深く知ること」、或いは「どうするかを、考えること」(三省堂国語辞典)と辞典に記されています。日常の中でも良く聴く言葉であり、私たちの身の周りには、ノーベル賞に値する前者の研究から、日頃私たちが生活の中で考える後者の定義の「研究」まで、多くの種類の「研究」があるようです。

大学の学部では、どのようにしたら「よく調べて事実や道理を深く知ること」が出来るか、つまり前者の「研究」の基礎的な方法を学びます。疑問に思っていることや興味のあることを、研究法に従って考え、まとめる方法を身につけます。

それでは、大学院修士課程の「研究」とは何でしょうか。学生は

看護学研究科長
村井 貞子



それぞれの専門分野の中で解決したい課題、しかも実際に役に立つ課題について研究の計画を立て、研究をします。特に看護学では、人を対象にした研究であるので難しい場合も多いのですが、よい研究結果ができれば、実践に応用されることもあります。

今、患者も医療者も了解出来る確実な根拠を持った医療・看護を行うことにより、患者のQOL(生活の質)の向上を目指して、病院等の現場では多くの看護研究が行われています。そのためにも大学院での研究は必要とされています。

現在、本学修士課程では、既に臨床或いは教育経験のある学生さん12名が、感染制御学、食看護学、がん看護学、小児看護学、成人老年看護学、助産学の各領域でそれぞれ研究に取り組んでいます。その成果が、秋田県が抱える健康課題解決の一助となることを願っています。

1年間の活動を振り返る

介護実践における「介護過程」

介護福祉学科 助教 永野 淳子

本年度から「介護過程」の授業を担当することになりました。

「介護過程」とは、介護を必要とする人たちの望む生活・人生を実現するために、介護福祉実践を進めるうえでの目標、介護計画の立案とその実施、評価等について学習する科目です。

介護というおむつを交換したり食事を介助したりと、目で見てわかり易いことばかりがイメージされるでしょう。しかし、実はそうした介護は、介護計画に基づいた介護福祉実践の一部であり、介護過程を学習することは、介護を必要とする人たちの支援において大切なことであるといえます。

介護過程の授業を展開するにあたり、新たに作成した教材を使用しました。学生たちには、毎回の授業の終わりに提出してもらうアクション・ペーパーを通して、作成した教材についていくつかの意見をもらいました。こうした学生たちの意見も踏まえて、学生たちが学習を深め、よりよい介護福祉実践を行うことができるように、今後も介護過程の教材開発に取り組みたいと思います。



登山・スキー実習にて

看護学科 講師 重川敬三

看護学部的一年次、基礎分野では「健康科学・レクリエーション実技」において、夏季の登山実習と冬季のスキー実習のどちらかを選択して受講することになっています。両実習ともに40名から50名の学生が参加していますが、スタッフは6～7名の教職員とそれぞれの公認指導員資格を有するボランティアにもお手伝いいただいています。登山実習は1泊2日で秋田駒ヶ岳の男女岳(おなめだけ・1,637m)を目指し、スキー実習は2泊3日で田沢湖スキー場にて実施しています。

参加する学生においては、宿泊訓練を通して社会性を身につけることを目的にしていますが、図らずも、今日我々が「絆」の文字に込める願いは、学生が実社会へと巣立ち、看護を通じた支援を始めるに際し、必ず身につけておかなければならないものです。学生には、在学時の早い段階から繰り返しこのような経験を重ねることによって、あるべき姿へと変貌を遂げられるものと信じています。



2011 海で遊ぼう!! 体験学習 冒険ランドin桂浜

2011年8月7日

本行事は、本学の教育理念(人道:Humanity)を活用し、「生きる力」をテーマとした「子育て支援」と「地域全体で支えながら子どもの生きる力を身につける」ことを目的に企画しました。体験学習は、「冒険教育」と「環境教育」の2つの要素で構成され、環境エコ学習、自然環境学習、生態系学習、体育・レクリエーション学習、美術学習のプログラムを取り入れ、当日は市内外の園児や児童、保護者ら約250名が参加し、本学の学生50名がボランティアを務めました。

子ども達が自然体験の機会を得ることにより自分自身の力を知り、人やもの(自然)との関係や距離などを知ることができると感じました。今後も継続して、地域固有の自然環境を最大限に活かし、体験型・参加型の学びの機会の推進や様々な教育資源との連携を図り、豊かな学びの機会の創出を目指していきたいと思えます。

(介護福祉学科 助教 及川 真一)



東日本大震災と私たち”をテーマにシンポジウム ～国際人道法フォーラム2011～を開催

開催日:2011年12月20日

未曾有の災害をもたらした東日本大震災の体験から私たちは何を学ぶか——をテーマに12月20日(火)、本学252・253教室を会場にフォーラムを開催した。

日本赤十字社事業局看護部長 浦田喜久子氏の「災害看護の原点に立ち未来を拓く」と題する基調講演に続き、「被災者支援の体験から～活動の報告～」をテーマにシンポジウムを開催した。パネラーの金愛子氏(石巻赤十字病院看護部長)、小原真理子氏(日本赤十字看護大学教授)、佐々木亮平氏(本学助教)からは、職員自らが被災する中での救護活動の様子や今尚続く陸前高田市における保健師の活動、また海外救援の現場からの報告などが生々しく報告された。

第二部の学生フォーラムでは、陸前高田第一中学避難所におけるボランティア体験が学生代表から報告された。学生からは「テレビだけでは分からないことを活動して初めて実感した。」「避難所の子どもの言葉に今でも自分自身が励まされている」「新たな出会いが沢山あった。嬉しいと感じる反面、団結力と他者への心配りは震災で生まれたのかと悲しくも感じた」などの率直な感想が聞かれた。

また特別ゲストとして避難所でボランティアの受入を担った自治組織「絆の丘」の河野義典氏が陸前高田市から参加し、復興、自立に向けて過酷の日々を迎えている現地の様子について報告された。



震災の体験を生かして? ～恒例の災害救護訓練を実施～

2011年9月20日・22日

文部科学省教育GP採択事業としてスタートした模擬災害救護訓練が採択事業終了後の今年も2日間にわたり開催された。

今回は東日本大震災を経験した後の訓練ということもあり教職員、看護・介護福祉の両学生ともに例年よりも緊迫感のある訓練を体験していたようだ。学生らは、初日の講義の後、救護所の設営、救護資器材の基本操作、適切な応急処置、負傷者の搬送、START式トリアージ、心のケア、炊き出し作業、通信訓練などに取組んだ。



サークル活動

★ダンスサークル～来年度に向けて～

看護学科 1年 岡部佑希さん

私たちダンスサークルは「常楽しく、高らかに舞え!」をモットーに昨年の4月から活動してきました。昨年は毎週水・木曜日に長期休業中も継続して活動し、主にカリヨン祭と敬老会でダンスを披露しました(どちらも好評でアンコールを頂きました!)。今年は昨年のメインイベントはもちろん、昨年は参加することができなかったクリスマス会や他校との交流も視野に入れ練習をしていきたいと思っています。

ダンススタイルとしては、主にBreak・HipHop・Copy・Jazzですが、最近は新たにエアロビクスとアインソーションを取り入れました。これは、健康的な体型の維持と体力の増進、ダンスパフォーマンスの完成度を高めることを目的に行っています。

部員は、現在の2年生が中心になり活動しており、この2年間プライベートや学習とお互いに信頼し合える関係となりました。進級後も様々なことがあるかと思いますが、このメンバーで乗り切っていきたいと思えます。来年度もどうぞよろしくお願い致します。



聴き書きサークル結成!

看護学科 3年 小岩奈央さん

平成23年12月に聴き書きサークルを結成しました。聞き書きの「聞」を「聴」にしたのは語り手のところ、気持ちに寄り添いながらお話しをお聴きしたいという私たちの思いからです。

記念すべき第1回目の語り手はALSに立ち向かう夫、松本茂さんを支える、松本るいさんです。るいさんの生まれたところから現在に至るまでを聴いていると、そのときの映像が思い浮かびます。るいさんが嬉しそうにお話してくださる姿を見て私もとても嬉しくなり、るいさんと同じ気持ちを共有できたと実感しました。対人援助職として、対象者に興味を持ってかわり、その人を知ることはケアを提供するうえでとても大切なことであり、「聴き書き」の活動で、聴く技術を身につけられたらと思っています。

サークル結成当初、4名の部員でスタートしましたが、これからは他大学の学生を含め、もっと活動範囲を広げ、積極的に活動していきたいと思えます。



学生インタビュー



ハンドボールでリフレッシュ!

高校時代にハンドボール部に所属し、国体への出場経験を持つ堀田幸さん。今も母校で後輩をサポートしながら、OGチームのメンバーとして多くの大会に出場し、現役選手として活躍している。

昨年、学内でも堀田さんが中心となってハンドボールサークルを立ち上げた。しかし、今はまだメンバーが足りず、思うように活動できていないとのこと。

「ハンドボールの魅力は豪快なプレーとスピード感。多くの人にハンドボールの楽しさを伝えたい。他大学チームと合同練習が

できたらうれしい」と語る。

目下の悩みはこれから始まる就職活動のこと。1年次に施設実習を体験し、高齢者介護だけでなく、障害を持つ方への介護にも関心を持つようになったという。「これからは就職に向けて施設見学やボランティア活動にも力を入れていきたい」と意気込みを語る堀田さん。

2年間の学生生活もいよいよ中盤戦に突入。夢に向かって勢いが加速していきそうだ。



介護福祉学科 1年
堀田 幸さん



紙屋先生と 佐藤真悟さん

本学における紙屋克子先生の講演には、一人の青年とお母さんの参加がありました。青年の名前は佐藤真悟さん(28歳)です。真悟さんは高校生のときに交通事故にあい、重傷な脳損傷により一時は命を危ぶまれましたが、お母さんの熱意と、紙屋式のリハビリ訓練を紙屋先生から学び、実際に行うボランティアグループ～チーム秋田～の支援によって現在は自宅で療養生活を送っています。今回、真悟さんには同年代の人との交流が必要であるとコーディネーターやお母さんが判断したことで、本学の学生にボランティア参加の依頼のために来てくれました。

(文:看護学科 准教授 中村 順子)



静岡県立大学教授 紙屋克子先生の特別講演

「専門職の協働・連携によるケアの実践
～生活の再構築に向けた援助プログラム」

(2011年12月22日開催)

EVENT Information

『昭憲皇太后と赤十字展』

明治神宮会館で5月28日まで

今年、明治が終焉して丁度百年にあたる。また国際赤十字の発展に寄与した昭憲皇太后基金が設立されて百年でもある。いま昭憲皇太后の偉業を偲ぶ基金創設100周年記念『昭憲皇太后と赤十字展』が5月28日まで東京新宿区の明治神宮会館宝物展示室で開催されている。

昭憲皇太后は、生涯にわたり教育・慈善活動に力を注がれ1888年の磐梯山噴火災害では、当時の日本赤十字社に医療救護活動を命じ、これが日本赤十字社の平時活動の始まりとなりました。展覧会には皇太后ゆかりの品々をはじめ、時代を先取りした人道活動の軌跡を紹介しています。

<「昭憲皇太后と赤十字展」>

会期 平成24年3月26日(月)～5月28日(月)

場所 明治神宮文化館 宝物展示室

主催 日本赤十字社、赤十字国際委員会、
国際赤十字・赤新月社連盟

協力 明治神宮

観覧料 無料

【記念展のお問い合わせ】

日本赤十字社 企画広報室

TEL/03-3437-7070



平成24年度
オープンキャンパス
予告

今年も企画満載のオープンキャンパス&カリヨン祭開催!
新しい発見!感動体験!楽しい企画でお待ちしています!!
詳しい情報は本学の公式サイトをご覧ください。

6月30日(土)
介護福祉学科の
単独開催になります。

8月4日(土)
看護学部・介護福祉学科

9月29日(土)
看護学部・介護福祉学科

●カリヨン祭：平成24年9月29日(土)～30日(日)



平成24年度
入試日程

■ 日本赤十字秋田看護大学 看護学部看護学科

- ・ 推薦、社会人学士等入学試験……………2012年11月17日(土)
- ・ 一般入学試験(センター試験利用入試) ……2013年 2月 9日(土)

■ 日本赤十字秋田短期大学 介護福祉学科

- ・ 推薦、社会人学士等入学試験……………2012年11月17日(土)
- ・ 一般入学試験……………2013年 2月 9日(土)
- ・ 大学入試センター試験利用入試……………2013年 2月 9日(土)
- ・ 自己推薦入学試験Ⅰ期……………2013年 2月23日(土)
- ・ 自己推薦入学試験Ⅱ期……………2013年 3月15日(金)

■ 日本赤十字秋田看護大学大学院 看護学研究科看護学専攻修士課程

- ・ Ⅰ期…………… 9月22日(土)
- ・ Ⅱ期…………… 1月26日(土)

入試に関するお問い合わせ TEL018-829-3759(入試学生係)

Editorial Note
編集後記

未曾有の震災と原発災害に見舞われ、復旧復興に明け暮れた一年はあっという間に過ぎ去りました。しかし、被災者の現状は容易には改善されず、被害の深刻さが日を迫って重くのしかかる今日この頃です。日本は世界でも有数の災害多発国ですが平穏は日常生活でふと忘れていた現実を今度の災害ほど強く思いしらされたものではありません。一方で危機のときには普段眠っている底知れない力が姿を見せるのも事実のようです。また圧倒的な自然の力を前にして人の無力さを感じたり、大切なもの

のを失ってわかる「本当に大切なもの」もあるようです。震災は多くの人々の価値観や生き方さえも変えました。苦しみの中でも健気に逞しく生きる被災者の姿を見るにつけ、人間は変わることができるからこそ生き続けられるのかもしれないと思う。ダーウィンは『種の起源』の中で強いものが生き残るのも弱いものが滅びるのもない。「変化に対応したものが生き残る」と説いたが、変化への対応はそう簡単ではないようだ。(T)